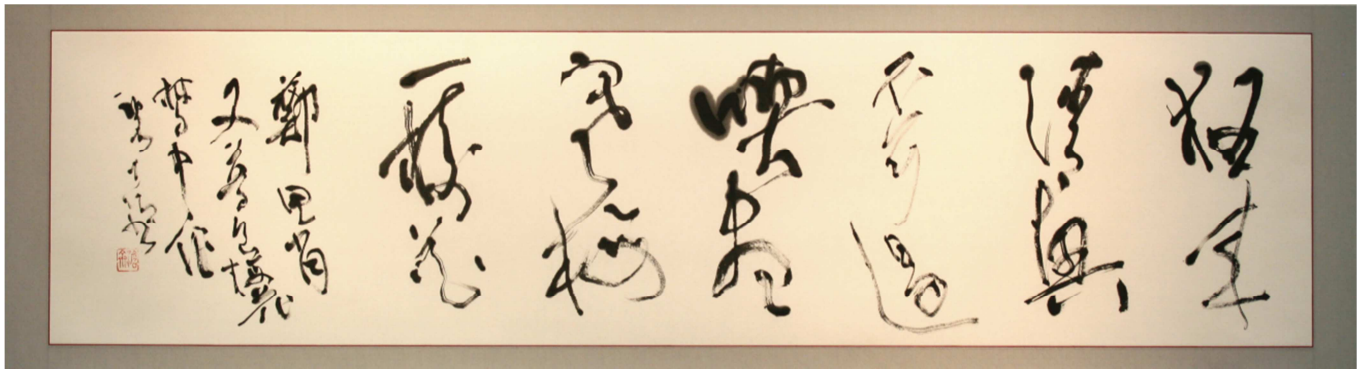
古轍（こてつ）

古い車行の迹

寶鏡三味



狂来（きょうら） 清興（せいきょう） 遏（や）むべからず

喫（くら）い尽（つ）くす寒梅（かんばい）一樹の花

又夢食梅花
夢中作

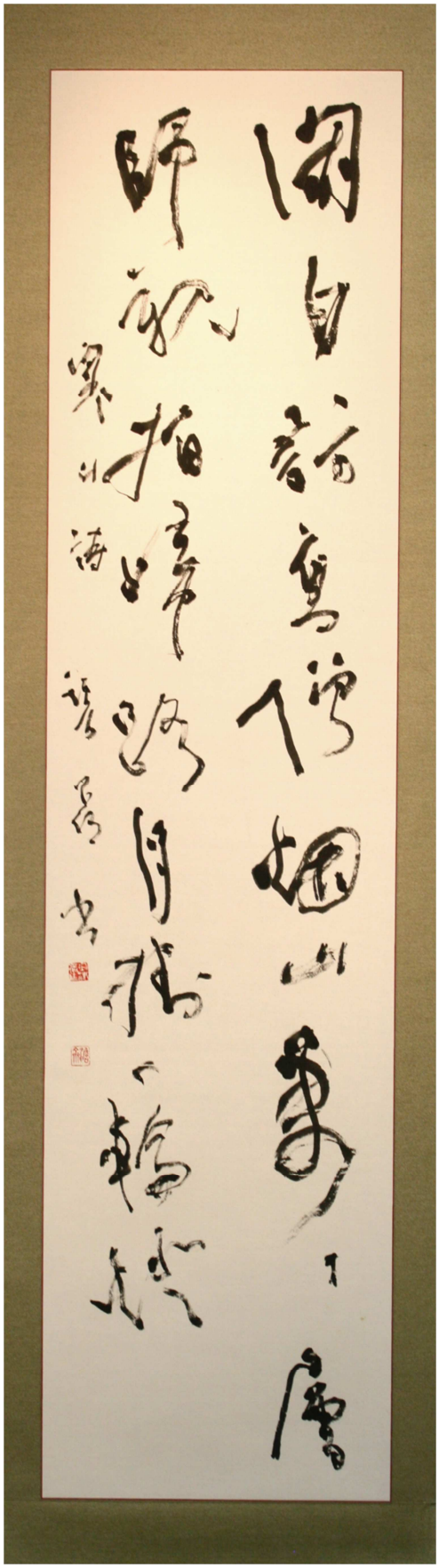
鄭思肖

老蠶作繭

老蚕繭を作る

年老いても本来の
自己を忘れず努めよ

蘇東坡　石芝

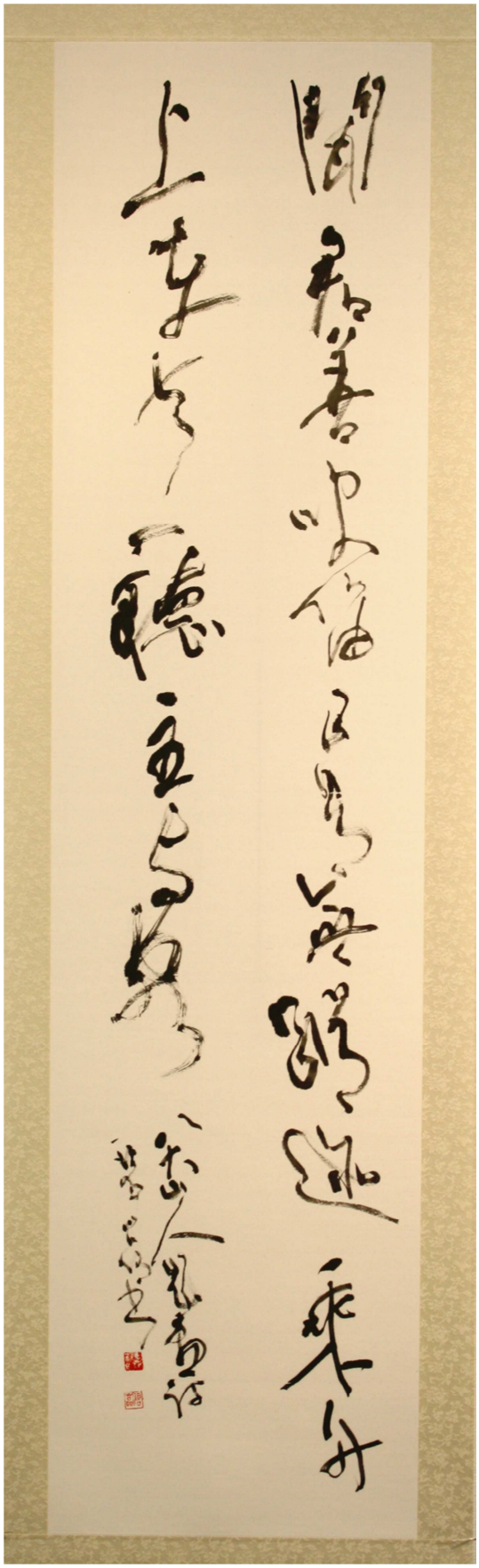


閑自に高僧を訪ぬるに烟山万万層なり
師親しく帰路を指せば月一輪の灯を掛く

寒山詩

窮(つ)くることを
薪(たきぎ)を為(す)むるに指(ゆびさ)すも
火は伝わるなり

荘子養生主



聞く君は笛を善くすと已に是れ蹤迹なし
舟に乗り車に上って去る一に主と客とに聴す

八大山人

和光（わこう）
同塵（どうじん）

光を和（やわ）らげて
塵（ちり）に同じくす

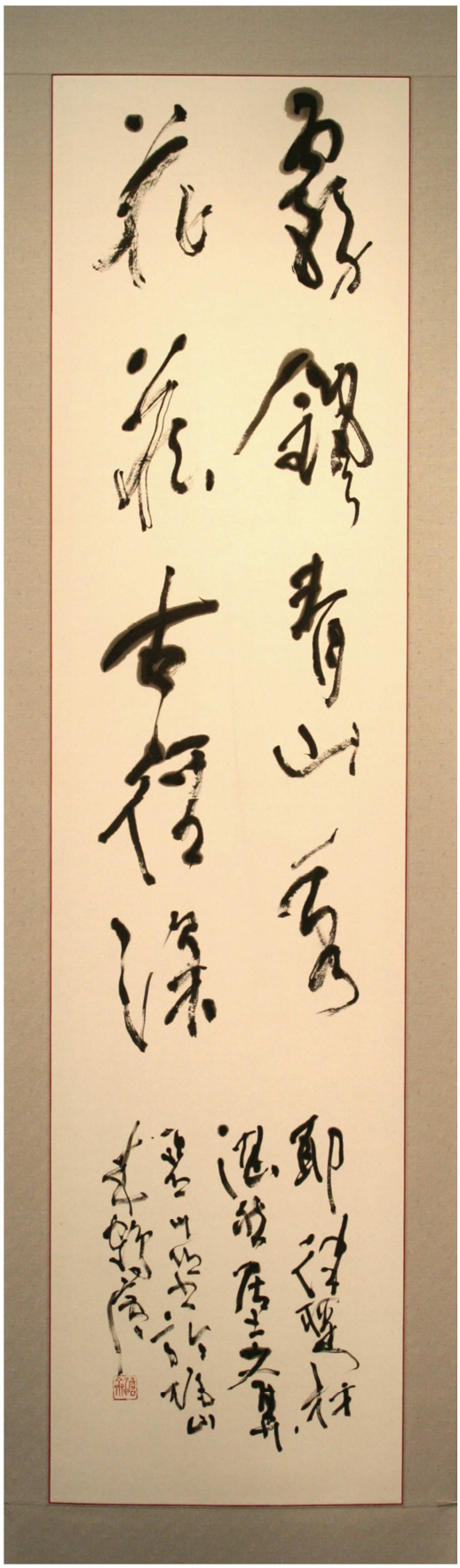
老子

花径（かけい） 曾（かつ）て
客に縁（よ）りて埽（はら）わず
蓬門（ほうもん）今始めて
君が為に開く

杜甫　客至

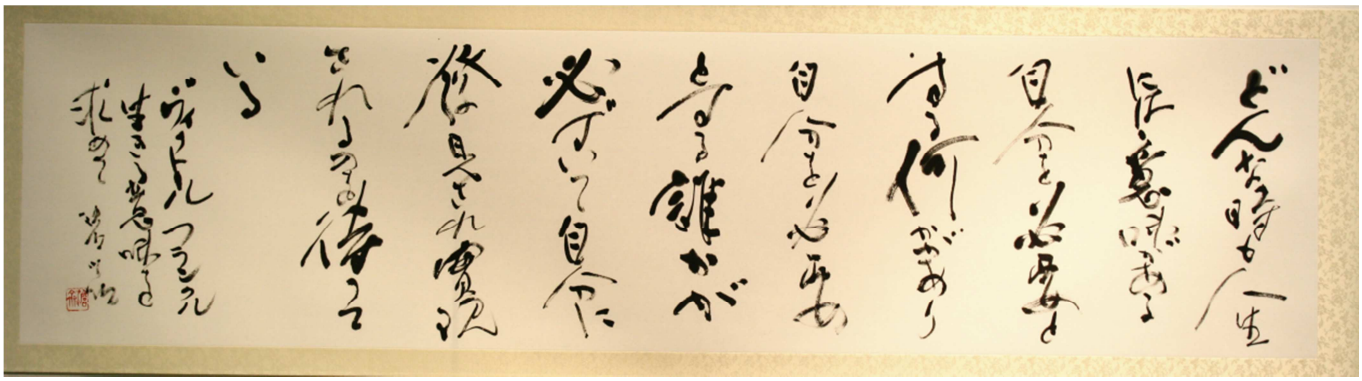
華林（かりん）に清月散じ
寒水澹（たん）として
波無し

倪瓚　述懐



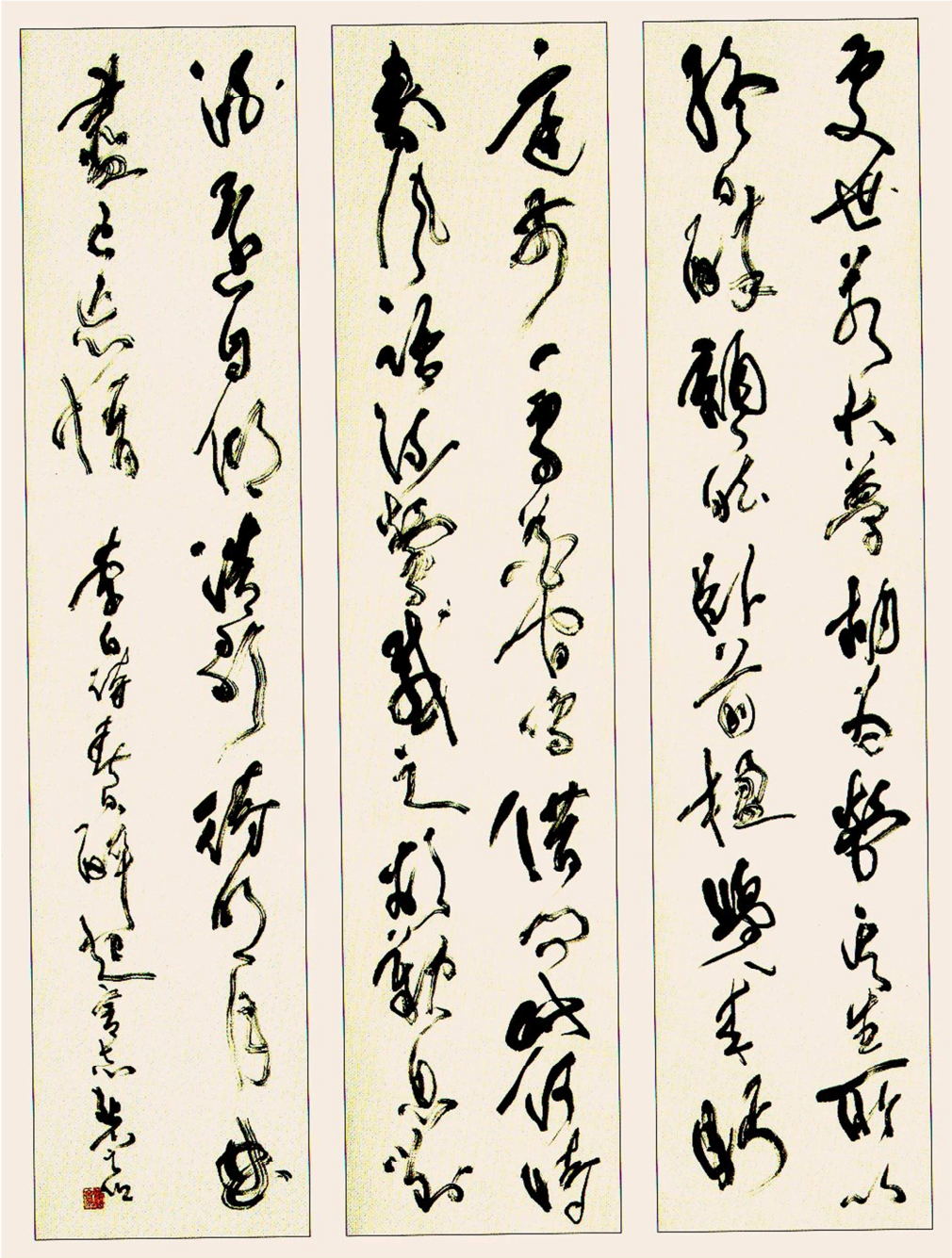
霧鎖(とざ)して青山秀(ひ)いで
花蔵(かく)して古径深(ふか)し

耶律楚材　湛然居士文集



どんな時も人生には
意味がある
自分を必要とする
何かがあり
自分を必要とする
誰かが必ずいて
自分に発見され
実現されるのを待っている

ヴィクトール フランクル
生きる意味を求めて



世に処ること　大夢の若し
胡為れぞ　其の生を労するや
所以に終日酔い
頽然として前楹に臥す
覚め来って庭前を眄むれば
一鳥　花間に鳴く
借問す　此れ何れの時ぞ
春風　流鶯に語る
之に感じて歎息せんと欲す
酒に対して還た自ら傾く
浩歌して明月を待ち
曲尽きて已に情を忘る

李白　春日酔起言志

個展を終えて

多くの人に支えられてやっとここまでたどりついた。
個展の作品は表装にまわすぎりぎりまでこれでよいのか自問自答していた。
しかし私の現在の精いっぱいのところであり、ありのままの姿である。
拙作の題材「漁夫生涯竹一竿」をもじって「書家生涯筆一本」は先師大島撫山老の書家としての生き方であった。私はそれを追慕している。
もし私にいくばくかの生があれば昇華された書を作って再び愛する鶴見で展観してみたいとは思っている。
私の生き方は三好達治の詩句を借りれば「拙を用いてはばかるな」である。

平成二十三年十月　　梶山　来鶴廬にて

会期／平成二十三年十月十一日～十月十七日

会場／鶴見区民文化センター サルビアホールギャラリー

書塾 澹 社 島津 碧嵓

〒230-0072 横浜市鶴見区梶山一ノ一ノ二七 ノ一〇五

☎ 045（571）1352

http://www.geocities.jp/shimazuhekigan